

## 哲学講座&amp;哲学カフェ

## 人はどうして学ぶのか？

## 1. はじめに

「ガクチカ」という言葉をご存じでしょうか。「学生時代に力を入れたこと」という意味であり、就職活動の定番の質問となっているようです。コロナ下で行動を制限された学生にとっては、この質問に答えるのが難しい...というのがメディアからの受け売りになります。学生たちはなんとかして他人に（ここでは就職の面接官に）説明することができる「ガクチカ」を手に入れたい。しかし「学生時代に力を入れたこと」は就職するための手段だから、必要なのでしょうか。

「学び」においても同じ構造を指摘することができます。私たちは幼い頃から、「立派な大人になるため、あるいは大人になって困らないため」という理由を提示された上で、学びのテーブルにつかされることに慣れていきます。勉強することは何らかの苦役を伴う振舞いではあるけれども、その行き着く先にはご褒美があると、もしくはそれをしなければネガティブな状態に陥るのだと。けれども、そんな因果関係に捉われない「学び」があるのではないか—これを今回のテーマに通奏低音として響かせて考えていきたいと思います。そしてさらには、「何かのために」「学ぶ」という因果関係を超えるということそれ自身が、自分の思考の枠を超えること（＝自分の思考の次元を改めること）であり、それこそが「学びの意味」たりうる可能性を示唆していきたいと思います。それは平たくいえば、昨日までとは違う視点で世界を眺めることができるということになるのではないのでしょうか。

2→予期せぬ学び

3→心の欲するままに「知りたい」

4→「偶然」から物事を捉える

5→「当たり前」を疑う

## 2. 『君たちのための自由論 グリラ的な学びのすすめ』内田樹 ウスビ・サコ 中公新書ラクレ

## 55-59

キャンパスという「場」の力

内田

オンライン授業の問題は、それが本質的にオンデマンド（on demand＝要求に基づいて）だということですね。アカデミアとは本来、学生たちがふらふらできる場所でなければならないと思うんです。キャンパスをふらふらしているうちに、もののはずみで（by accident）「そんな学問がこの世に存在するとは知らなかった分野」に出会い、もののはずみで取る気のなかった科目を

履修し、図らずも学ぶ気がなかったことを学んでしまった。そういうことが大学では実によく起こる。その偶然性がアカデミアの豊饒性と開放性を担保していたと思うんです。

「オンデマンドの学び」というのは、メニューを見てから料理を選ぶようなものです。あらかじめ自分の好き嫌いや関心の有無で選択の範囲が限定されてしまう。たしかに「求める通りのもの」は手に入るけれど、「図らずも学んでしまう」というチャンスは失われる。オンラインは学習弱者には親和的な学習手段かもしれませんが、学びにひらかれた知性をさらに成長させる「もののはずみで」の学びの機会は減殺される。ですから、学生たちを三つか四つの層に分けて、それぞれが最大の利益を引き出せるシステムを工夫していく必要があると思います。

サコ

そうですね。日本のキャンパスはまるで聖地です。教育現場に身を置くこと自体に価値があり、今回それができないことで皆が不安にさらされたのです。「学習の機会を止めないよう、オンラインでも議論しましょう」といくら伝えても、学生は「あのキャンパスに肉体が行っていない」ことにアイデンティティが揺らぐほどの所在なさを抱えている。

これは幼稚園から高校まで、フィジカルな「場」に依存する教育の弊害でもあると思います。だからその「場」を重いと感じる人は引きこもってしまう。アメリカには全科目オンラインで履修可能とした大学もありますが、日本では難しいでしょう。「場」があって初めて教育は成り立つと、誰もが思っていますから。

もちろんキャンパスは小さな社会であり、内田先生がおっしゃったような出会いの偶然性という利点を持っています。それはつまり、キャンパスで学生が学ぶものは授業からだけではないということであり、逆に授業だけならオンラインでも十分と言える。(略)

内田

その通りだと思います。教室での教育活動はオンラインで代替できる。でも、思いがけない学術的な活動と出会って、化学反応を起こすという偶然的な出会いはフィジカルな、実在なキャンパスでしか体験できない。

オンライン授業で学生の平均学力は多分上がるでしょう。出席率も向上するし、教員とのコミュニケーションも密になっているから。でも、「大化け」する学生はなかなか出にくいんじゃないかな。文科省は数字だけ見て「なんだ、オンラインで行けるじゃないか」とあっさり言うかもしれませんけれど。(笑)

### 3. 『夕暮れに夜明けの歌を 文学を探しにロシアに行く』 奈倉有里 イーストプレス

12-13

新しい言語を学ぶ—その魅惑の行為を前に、人は新たに歩きはじめる。母語ではとうにありふれたものになっていたものごとを、もうひとつの言語の世界でひとつひとつ覚えるたびに、見知った世界に新しい名前がついていく。それはオクジャワの『祈り』のようでもある—賢い者には

頭を、臆病者には馬を……この歌の解釈は多様で、たとえば「賢い者には頭」というのは、賢さとは心で悟るものだから頭脳とは別物だということを、「幸せな者にはお金」が必要なのは、幸福か否かはお金の問題ではないことをそれぞれ暗示しているとする説や、そうではなく全体として一般常識的な固定観念に対する皮肉なのだとする説などがある。けれどもそれらの解釈とはまた別の層にある要素として、この詩には言語への希求のようなものがあるように思われてならない。この詩を読もうとすると、ひとつひとつの単語の辞書的な意味を疑わざるをえなくなり、賢さや幸せという、普段は自明のものとして認識している言葉の意味を考えなおすことになる。そうして緩やかにつながる言葉同士の関連性に目を凝らし、意味の核心に迫ろうとするが、核心は近づいたかと思えばまた遠ざかる。「言葉」と「意味」はひとつにはならない、でもだからこそ面白い—そんな感覚が歌にのって伝わってくる。

言語の入り口に立とう。目の前にはどこまで続くのかわからない言葉の森がある。ぼんやりと光っているのははんだらう。坂道の向うの図書館から漏れている—あれは本の光だ。

### 37-39

ペテルブルクに来て二度目の冬が近づいていた。あたりまえのことだが、夏が白夜なら冬は暗い。朝八時のバスで学校へ向かうときはまだ夜中のように暗く、学校の食堂で昼食をとるころにわずかに空が白むが、午後の授業を受けているうちにまたあつという間に暗くなってしまう。だから通常の授業が終わったあとのエレナ先生の個人授業はいつも薄暗かった—当時のペテルブルグでよく用いられていた照明は日本でいえばバスルームにあるような電球で、点けても部屋の中央を心もとなく照らすだけで、明るいとは言い難い。

グループの授業がひととおり終わったあと、私は薄暗い廊下をずっと進んだ先のつきあたりにあるちいさな部屋へ向かう。その部屋で私は先生と一緒に、ロシア語をはじめたきっかけでもあるレフ・トルストイを読み、新たに好きになったブロークを読んだ。トルストイなら『クロイツェル・ソナタ』を読みたいと言うと、エレナ先生は「個人的にもすごく大事な作品」だからぜひ読もうと言った。あまりに目をぎらぎらと光らせて身を乗りだすので、不意に怖くなったほどだった。授業を進めながら、先生はその理由を話してくれた。『クロイツェル・ソナタ』は、主人公ポズドヌィシェフが妻の浮気を疑い、発見し、嫉妬にかられて刺し殺す話である。先生は過去に、結婚相手に暴力をふるわれ離婚していた。その経緯には相手の「嫉妬」という感情が大きく作用していたという。だからこの作品に関心を持つ理由は過去のつらい話に直結していたのだが、先生は驚くほど率直に、自分の感じたこと、後悔していること、いまでも考えていることなどを打ち明けて、私に「一緒に考えよう」と語りかける。この時期、私はそれまで知らなかった単語をたくさん知り、それを実際に使うことにドキドキしていた。しかも、そのドキドキと一緒に覚えた言葉は決して忘れないのだ。語学学習というと、一般的には表面的な会話や社交辞令のような言葉から入ることが多い。むしろその便宜性、妥当性は充分にあるとしても、しかし私たちの心の底にあるのはもっと根源的な、どろどろとした得体の知れないものだ。そのどろどろを掬って言葉にしていくことは、その言語で思考できるようになるための第一歩なのかもしれない。

#### 4. 『世の中は偶然に満ちている』 赤瀬川原平 筑摩書房

11-12

##### 序章 写真と偶然

この世は偶然に満ちている。

この世の始まりのビッグバンにしても、偶然から始まったらしい。偶然から偶然が増殖して、途中から人類が加わった。

その人間には考える頭が発達して、偶然だけでは困る、できるだけ生きやすいようにと、人口空間を造り上げた。

だから都市はできるだけ偶然を排除し、自然を排除している。でも町は永遠ではなく、どうしても老化する。その老化してゆるんだ所から、追い出された偶然、自然が、じわじわと進入してくる。

カメラを手に歩いていると、いちばん面白いのはそのところだ。

人間はふだん、町の必要なところしか見ていない。家の近所、勤め先の町にしても、まずは必要な所だけ見て通り過ぎる。

でもカメラと歩くと、人は現代人から狩猟採集民にさかのぼる。必要でもないところに目がいき、思いもがけない状態のものを見つける。

思いがけない、つまり人間の想定外のもの、それが人間の目には新鮮に映るのだから、不思議なものだ、仮にそれが人間の造った物であるにしても、長い年月に忘れられ、放置されて、思わぬ状態に転化して、散歩狩猟民の目に迫る。

人間が嫌いなのではない。人間の正面よりも、その裏側が面白いのだ。人間につながる、その気配、人が去った様子、人が脱いだ靴、人が使った道具、そんなところにかんじられる漠然とした人間の方が面白い。

#### 5. 『髑髏となってもかまわない』 山折哲雄 新潮選書

30-31

「生きる力」だけでいいのか。

「生きる力」「生きる力」の合い言葉で、戦後の半世紀が過ぎた。

気がついてみれば、こんどは「共生」「共生」の掛け声が流行り言葉になっていた。

「生きる力」万歳と「共生」万歳の半世紀が、ただのっぺりと、伸び切ったゴムのようにつづいていたのだった。

その結果、どこからもきこえなくなってしまったのが「死の心構え」「死ぬ覚悟」といった、少々トリッキーではあるけれども、ビートのきいた言葉だった。それらの言葉は、誰にかえりみられることもなく、戦後の廃墟に打ち棄てられたまま、雨ざらしになっていたような気がする。

「生きる力」万歳の声にたいして、「死への心構え」といってこれを迎え撃つ気概に欠けていたのである。

生まれてきた者は、やがて必ず死んでいく、こんな当たり前のことが半世紀以上にもわたって打ち棄てられ、忘れられてしまっていたのだ。

### 32-33

「血縁」の「縁」があぶなくなっている。家族の絆が切れ、親子の縁、兄弟の縁、夫婦の縁がおかしくなっているということなのだろう。

「地縁」の「縁」もボロボロになりかかっている。向う三軒両隣りの縁が消え、町内会の話し合いの場が失われ、井戸端会議があっさり過去のものになってしまった。そこで「無縁」であるといっていたのだった。

百歳老人の行方不明、独居老人の増大、保険金詐欺、そして殺人、などなど、それらはすべてもの無縁社会によって引き起こされる人災であるといっていた。しかし、どうだろう。落ちついて考えてみると、それらの嘆きの声のすべては、どうやら生の側から発せられた声、声……のように見える。「生きる力」あるいは「共生」というメッセージの応援をうけて発せられたいたことがわかる。

われわれの社会は、かつて「三界の万霊(さんがいのばんれい)」ということをよくいっていた。あれはいったい何だったのか。この世から去っていった無数の無縁さんたちのことを大切に思って、そう呼びならわしたのではなかったのか。

死んでから先祖の墓に入ることのできる者は、まだいい。両親の墓と同居できる者も幸せの部類だろう。けれども昔から、どこにも所属できない、そして身元も不確かな無縁の魂がこの宇宙世界にはみちみちていた。それらの、空中をさま迷うばかりの無縁さんたちを供養して祀る風習を、われわれは大切にしてきたのである。その風習は今、いったいどこに行ってしまったのだろうか。

人は死にむかうとき、血縁と別れ、地縁とおさらばし、孤独で、たった一人の魂としてあの世に旅立つ。それを見送り、せめてあの世で達者に暮らせよと祈って、三界の万霊に敬意を表してきたのである。

「無縁社会」、の嘆きの声をあげてばかりいる場合ではなかったのである。いま、その三界の万霊に思いをいたす人間が、どれだけいるのか。